

はしがき

国民統合は冷戦終結後、国際社会を構成する国々にとり大きな問題として再浮上した。民族紛争の勃発などにより国民統合の重要性が考えるべき課題となってきたからである。それに加えて、世界的な貧富の格差の拡大と交通機関の発達、通信手段の画期的な進歩（電子メールや携帯電話の利用など）に伴い、国際的な労働者（労働力）の移動が活発化した結果、国民の多様性がいっそう進行した先進国においても社会の安定のための国民統合が課題となった。さらにまた、グローバル化の結果生じたと考えられている社会における格差の拡大によっても国民統合が国家の喫緊の課題として浮上してきている。

本研究はマレー半島南端に位置する多民族国家シンガポールの国民統合を取り上げる。その理由は、民族や宗教、言語の多様性に特徴づけられる東南アジア諸国の多くの国々は20世紀の後半、大規模な戦争や内戦など激動の時代を経験したが、そのなかでも独立（1965年）後のシンガポールのみは民族などに関わる戦争や内戦などを経験せず、社会的・政治的な安定を維持しており、独立後わずか十数年で新興工業国（NICs）と呼ばれるようになり、先進経済を擁するようになったという点において、稀有な国であるからである。

シンガポールにはさまざまな顔がある。20世紀後半の成功物語を体現する都市国家、アジアを代表する国際金融センター、世界的な競争力を有する経済、多民族国家（マレー系、およびインド系住民は少数派であり、多数派は中国系住民である）、英語化した社会、緑があふれ花の咲き乱れる庭園都市、東南アジアの空輸や海運の中核、世界有数の会議開催都市、治安のよい国、高層集合住宅の建ち並ぶ団地国家、「罰金（fine）の国」、半世紀近く政権党が変わらない国、言論や集会の自由を制限する管理国家、私生活まで政府に干渉されることがある国などをあげることができる。どの国も問題を抱えているが、シンガポールもその例に漏れない。要約するならば、シンガポールは成長のために経済的な自由を国をあげて追求する反面、政治的・社会的安定を重視するという大義名分によって市民的・政治的な自由や権利を厳しく制限する国と特徴づけられよう。

本書はこうしたシンガポールを成長と安定を達成するために同政府、すなわち人民行動党政権が推進してきた国民統合のあり方から解明しようとするものである。序章ではシンガポールにおいてなぜ国民統合が問題になるのかについて、中国系やマレー系の住民からなる多民族国家であること、マレーシア、イ

インドネシア、ブルネイ（1984年、マレーシアから独立）というマレー世界に囲まれた中国系住民中心の国家であることなど国内外の情勢に目を向ける。第1章ではシンガポールの発展の証として、また典型的な風景としてよく言及される公的な高層集合住宅の政治的・経済的・社会的な役割について論じる。政府が供給する高層集合住宅はシンガポール社会を根本から変革する役割を果たし、工業化と経済成長の、また社会統制を担う社会政策の中核として機能したのである。第2章では英語を学校教育において、また実務において基軸言語とした言語・教育政策に焦点を当て、言語の政治性を考える。社会統合と経済成長のための英語の利用はシンガポール国家にとって両義的な結果をもたらすことになっただけではなく、国民にとっても英語は単にプラスの資源とただただではなかった。第3章では住宅政策、言語・教育政策を相互に補う国民意識の強化策を検討する。人口の量と質の両面からの調節を狙う家族計画やシンガポール風の英語をシンガポール経済の拡大への障害とみなす「よい英語を話そう」運動、独立を祝う国家儀礼などが社会教育装置としてどのように公的な住宅供給や学校教育に関わるのかを探る。終章では1章から3章で取り上げた住宅供給、英語を媒体言語とする教育、現在のシンガポール国家への帰属感を強化するために学校や社会で行われている「国民教育」などをまとめ、進展するグローバル化に積極的に与するほかないと政府が主張するシンガポールの国民統合の方向性を考える。

本書ができてあがるまでに、国内外を問わず多くの方々にお世話になった。本書に関わる論考に忙しいなかコメントをくださった方、インタビューを手際よく調整してくださった方、快くインタビューに応じてくださった方、資料の収集を助けていただいた大学や研究所の図書館の方など、記して感謝したい。とりわけ、東京大学大学院教授服部民夫先生、大阪大学名誉教授山中永之佑先生、追手門学院大学教授正信公章先生にはお世話になった。記してこころより御礼申し上げたい。残念ながらインタビューのうち本書に収録できたのは一部であり、いただいたコメントを生かしきれなかったのは筆者の責任である。なお、本書の出版には追手門学院大学経営学会から出版助成をいただいている。記して感謝したい。

そしてさいごに、法律文化社の秋山泰社長にはたいへんお世話になった。こころから感謝申し上げたいと思う。

2008年3月1日

中 村 都